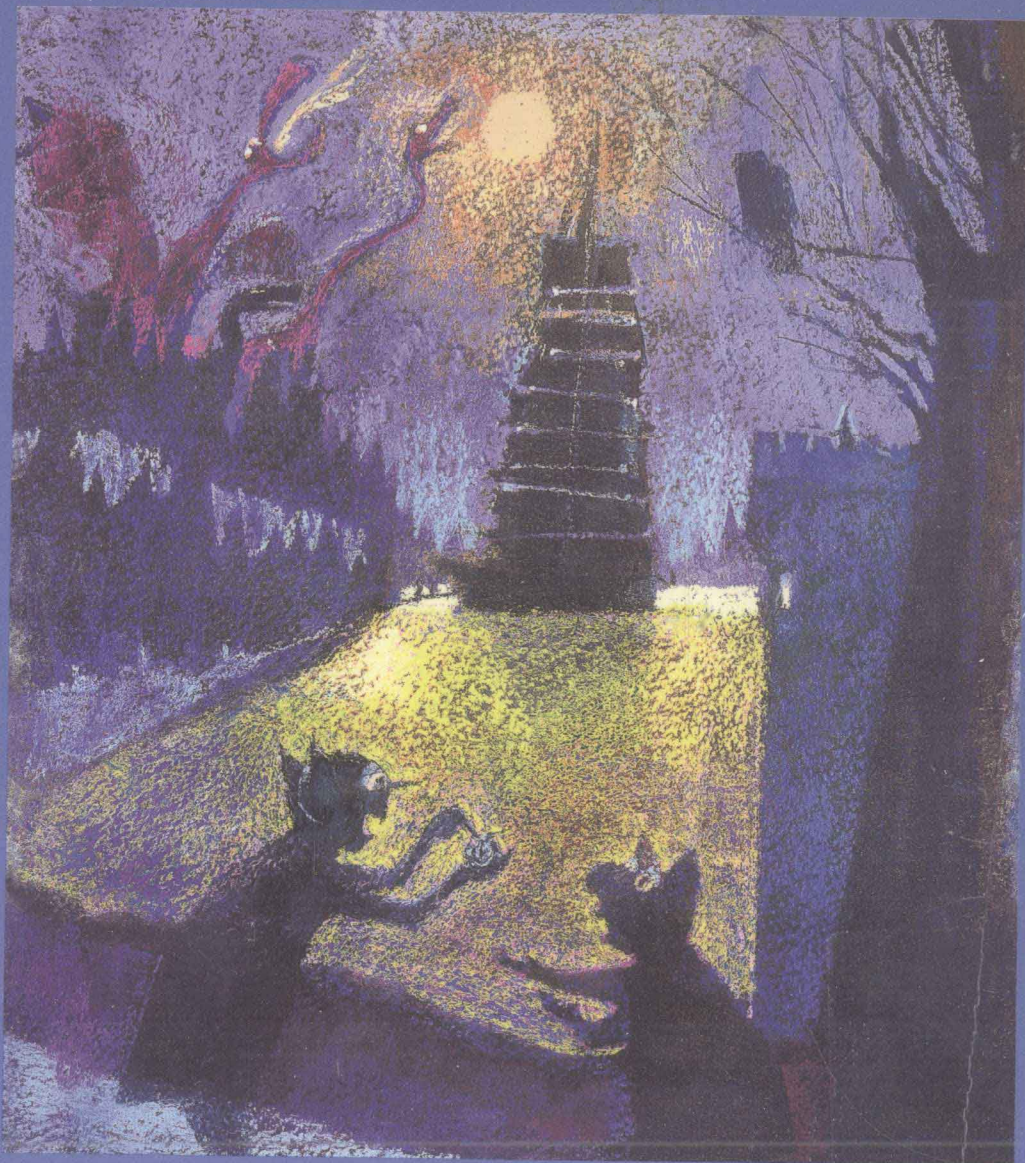


HARRY POTTER AND *Harry Potter* THE GOBLET OF FIRE

ハリー・ポッターと 炎のゴブレット ①

J.K.ローリング作

松岡 佑子 訳



静山社

HARRY POTTER AND  THE GOBLET OF FIRE

ハリー・ポッターと 炎のゴブレット①

J.K.ローリング作
松岡 佑子 訳

訳者紹介

松岡佑子（まつおか ゆうこ）

同時通訳者、翻訳家、国際基督教大学（ICU）卒、モントレー国際大学院大学（MIIS）国際政治学修士。AIIC（国際会議通訳者協会）会員。NHK 中央審議会委員。みやぎ夢大使。

ICU 卒業後、海外技術者研修協会（AOTS）常勤通訳。上智大学講師、MIIS 客員教授、日米会話学院同時通訳課講師として通訳教育の経験も深い。国際労働機構（ILO）では1981年以来年次総会の通訳を続けている。

現在、静山社社長として、またハリー・ポッターシリーズの翻訳者として、講演も多く、エッセイストとしても活躍中。

筋萎縮性側索硬化症（ALS）の患者、家族を支援する活動を亡夫から引継ぎ、2006年、その国際会議を日本で開催するための準備委員長も務める。

ハリー・ポッターと炎のゴブレット⑤巻

二〇〇二年二月一日 初版第一刷発行

著者

J・K・ローリング

訳者

松岡佑子

翻訳協力

© 2002 YUKO MATSUOKA

ジェリー・ハーコート

宇尾史子／村松夏子

ダン・シュレシンジャー

表紙画・イラスト
デザイン・レイアウト

小関 潤

編集・制作

木田 恒

発行者

松岡佑子

発行所

株式会社 静山社

DTP制作

株式会社東京研文社

印刷・製本所

凸版印刷株式会社

〒一六二〇八一四 東京都新宿区新小川町六一四〇
TEL 〇三（三二六七）六九四一
FAX 〇三（三二六七）六九四〇

ハリー・ポッターと炎のゴブレット ①上巻【目次】

Harry Potter
and
the Goblet of Fire

第1章	リドルの館 5	The Riddle House
第2章	傷痕 27	The Scar
第3章	招待状 41	The Invitation
第4章	再び「隠れ穴」へ 59	Back to The Burrow
第5章	ウィーズリー・ウィザード・ウィーズ 77	Weasleys' Wizard Wheezes
第6章	移動キー 99	The Portkey
第7章	バグマンとクラウチ 115	Bagman and Crouch
第8章	クイディッチ・ワールドカップ 147	The Quidditch World Cup
第9章	闇の印 181	The Dark Mark
第10章	魔法省スキャンダル 225	Mayhem at the Ministry

第11章	ホグワーツ特急に乗って	245	Aboard the Hogwarts Express
第12章	トライウィザード・トーナメント 三大魔法学校対校試合	265	The Triwizard Tournament
第13章	マッド・アイ・ムーディ	299	Mad-Eye Moody
第14章	許されざる呪文	325	The Unforgivable Curses
第15章	ボーバトンとダームストラング	355	Beauxbatons and Durmstrang
第16章	炎のゴブレット	385	The Goblet of Fire
第17章	四人の代表選手	419	The Four Champions
第18章	杖調べ	445	The Weighing of the Wands
第19章	ハンガリー・ホーンテール	483	The Hungarian Horntail
第20章	第一の課題	519	The First Task

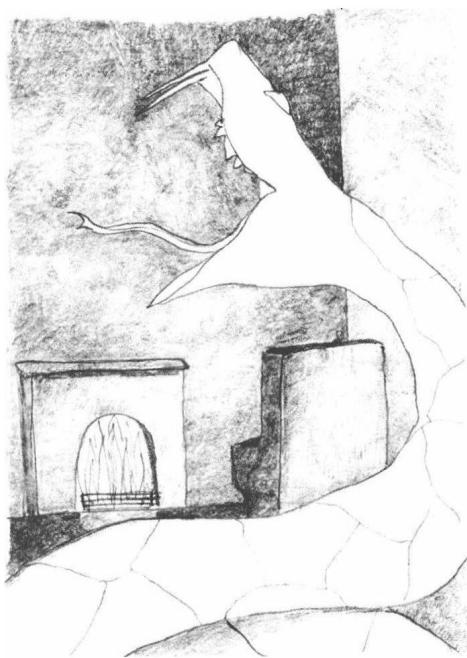
ハリー・ポッターと炎のゴブレット ⑦ 巻目次

第21章	屋敷しもべ妖精解放戦線	第30章	ペンシーフ
第22章	予期せぬ課題	第31章	第三の課題
第23章	クリスマス・ダンスパーティ	第32章	骨肉そして血
第24章	リータ・スキーターの特ダネ	第33章	死喰い人
第25章	玉子と目玉	第34章	直前呪文
第26章	第二の課題	第35章	真実薬
第27章	パッドフット帰る	第36章	決別
第28章	クラウチ氏の狂気	第37章	始まり
第29章	夢		

第
1
章

CHAPTER ONE
The Riddle House

リドルの館



リドル家の人々がそこに住んでいたのはもう何年も前のことなのに、リトル・ハングルトンの村では、まだその家を「リドルの館」と呼んでいた。村を見下ろす小高い丘の上に建つ館は、窓にはあちこち板が打ちつけられ、屋根瓦ははがれ、蔦が絡み放題になっていた。かつては見事な館だった。その近辺何キロにもわたってこれほど大きく豪華な屋敷はなかったものを、いまやぼうぼうと荒れ果て、住む人もない。

リトル・ハングルトンの村人は、だれもがこの古屋敷を「不気味」に思っていた。五十年前、この館で起きた、なんとも不可思議で恐ろしい出来事のせいだ。昔からの村人たちは、噂話の種が尽きてくると、いまでも好んでその話を持ち出した。繰り返して語り継がれ、あちこちで尾ひれがついたので、何がほんとうなのかいまではだれもわからなくなっていた。しかし、どの話もはじまりはみな同じだった。五十年前、リドルの館がまだ、きちんと手入れされた壮大な屋敷だったころのこと。ある晴れた夏の日の明け方、居間に入ってきたメイドが、リドル家の三人が全員息絶えているのを見つけたのだ。メイドは悲鳴をあげて丘の上から村まで駆け下り、片っ端から村人を起こして回った。

「目ん玉ひんむいたまんま倒れてる！ 氷みたいに冷たいよ！ デイナーの正装したまんまだ！」

警察が呼ばれ、リトル・ハングルトンの村中が、シヨックに好奇心が絡み合い、隠しきれない興奮で沸き返った。だれ一人としてリドル一家のために悲しみにくれるような無駄はしな

った。なにしろこの一家はこの上なく評判が悪かった。年老いたリドル夫妻は、金持ちで、高慢ちきで、礼儀知らずだったし、成人した息子のトムはさらにひどかった。村人の関心事は、殺人犯がだれか、に絞られていた——どう見ても、当たり前前に健康な三人が、揃いもそろって一晩にコロリと逝くはずがない。

村のパブ、「首吊り男」はその晩大繁盛だった。村中が寄り集まり、犯人はだれかの話で持ち切りだった。そこへリドル家の料理人が物々しく登場し、一瞬静まり返ったパブに向かって、フランク・ブライスという人物が逮捕されたと言い放った。村人にとっては、家の炉端を離れてわざわざパブに来たかいたったというものだ。

「フランクだって！ 何人か叫んだ。

「まさか！」

フランク・ブライスはリドル家の庭番だった。屋敷内のボロ小屋に一人で寝泊りしていた。戦争から引き揚げてきたとき、片脚が強ばり、人混みと騒音をひどく嫌うようになっていたが、そのとき以来ずっとリドル家に仕えてきた。

村人は我も我もと料理人に酒をおごり、もっと詳しい話を聞き出そうとした。

「あの男、どっかヘンだと思ってたわ」

シェリー酒を四杯引っかけたあと、ウズウズしている村人たちに向かって料理人はそう言った。

「愛想なし、って言うか。たとえばお茶でもどうって勧めたとするじゃない。何百回勧めてもダメさね。つき合わないんだから、絶対」

「でもねえ」カウンターにいた女が言った。

「戦争でひどい目に遭ったのよ、フランクは。静かに暮らしたかったんだよ。なんにも疑う理由なんか——」

「ほかにだれが勝手口の鍵を持ってたっていうのさ？」

料理人が噛みついた。

「あたしが覚えてるかぎり、とうの昔っから、あの庭番の小屋に合鍵がぶら下がってた！ 昨日の晩はだれも戸をこじ開けちゃいないんだ！ 窓も壊れちゃいない！ フランクは、あたしたちみんなが寝てる間にこっそりお屋敷に忍び込みやあよかった……」

村人たちは暗い顔で目を見交わした。

「あいつはどっか胡散臭いと睨んでた。そうだともし」カウンターの男が呟いた。

「戦争がそうさせたんだ。そう思うね」パブのおやじが言った。

「言ったよね。あたしやあいつの気に障ることはしたくないって。ねえ、ドット、そう言っただろ？」

隅っこの女が興奮してそう言った。

「ひどい癩癩持ちなのさ」

ドットがしきりに頷きながら言った。

「あいつがガキのころ、そうだったわ……」

翌朝には、リトル・ハングルトンの村でフランク・ブライスがリドル一家を殺したことを疑う者はほとんどいなくなっていた。

しかし、隣村のグレート・ハングルトンの暗く薄汚い警察では、フランクが自分は無実だとは何度でも頑固に言い張っていた。リドル一家が死んだあの日、館の付近で見かけたのは、たった一人。黒い髪で青白い顔をした、見たこともない十代の男の子だけだったと、フランクはそう言い張った。村人はほかにだれもそんな男の子は見えていない。警察はフランクの作り話に違いないと信じきっていた。

そんなふうに、フランクにとっては深刻な事態になりかけたそのとき、リドル一家の検死報告が警察に届き、すべてが引っくり返った。

警察でもこんな奇妙な報告は見たことがなかった。死体を調べた医師団の結論は、リドル一家のどの死体にも、毒殺、刺殺、射殺、絞殺、窒息の跡もなく、(医師の診るかぎり)全く傷つけられた様子がないという。さらに報告書は、リドル一家は全員健康そのものである——死んでいるということ以外は——と明らかに困惑を隠しきれない調子で書き連ねていた。医師団は、(死体になんとか異常を見つけようと決意したかのように)リドル一家のそれぞれの顔には恐怖の表情が見られた、と記していた。

——とはいえ、警察がイライラしながら言っているように、恐怖が死因だなんて話はだれが聞いたことがあるものか？

リドル一家が殺害されたという証拠がない以上、警察はフランクを釈放せざるをえなかった。リドル一家の遺体はリトル・ハングルトンの教会墓地に葬られ、それからしばらくはその墓が好奇の的になった。村人の疑いがモヤモヤする中、驚いたことにフランク・ブライスは、リドルの館の敷地内にある自分の小屋に戻っていった。

「なんてったって、あたしやあいつが殺したと思う。警察の言うことなんか糞食らえだよ」
 パブ「首吊り男」でドットが息巻いた。

「あいつに自尊心のかけらでもありや、ここを出ていくだろうに。わかっているはずだよ。あいつが殺ったのをあたしらが知ってるってことをね」

しかし、フランクは出ていかなかった。リドルの館に次に住んだ家族のために庭の手入れをしたし、その次の家族にも——そのどちらも長くは住まなかったが——。もしかしたらフランクのせいもあったかもしれない。どちらの家族も、この家は何かイヤな雰囲気があると云った。だれも住まなくなると、屋敷は荒れ放題になった。

「リドルの館」のいまの持主は大金持ちで、屋敷に住んでもいなかったし、別に使っているわけでもなかった。村人たちは「税金対策」で所有しているだけだと言ったが、それがどうい

意味なのか、はっきりわかつている者はいなかった。大金持ちはフランクに給料を払って庭仕事を続けさせていたが、もう七十七歳の誕生日が来ようというフランクは、耳も遠くなり、不自由な脚はますます強ばっていた。それでも天気の良い日には、だらだらと花壇の手入れをする姿が見られたが、いつのまにか雑草が、おかまいなしに伸びはじめているのだった。

フランクの戦う相手は雑草だけではなかった。村の悪ガキどもが屋敷の窓にしょっちゅう石を投げつけたし、フランクがせっかくきれいに刈り込んだ芝生の上で自転車を乗り回した。一度か二度、肝試しに屋敷に入り込んだこともあった。ガキどもは、年老いたフランクがこの館と庭に執着しているのを知っていて、杖を振り回し唖れ声を張りあげて、庭のむこうから足を引きずってやってくるフランクを見ておもしろがっていた。フランクのほうは、子供たちが自分を苦しめるのは、その親や祖父母と同じように、自分を殺人者だと思っているからと考えていた。だから、ある八月の夜、ふと目を覚まして、古い屋敷の中に何か奇妙なものが見えたときも、フランクは、悪ガキどもが自分を懲らしめるために、また一段と性質の悪いことをやらかしているのだろう、くらいにしか思わなかった。

目が覚めたのは脚が痛んだからだった。歳とともに痛みはますますひどくなっていた。膝の痛みを和らげるのに、湯たんぽのお湯を入れ替えようと、フランクは起き上がって、一階の台所まで足を引きずりながら下りていった。流し台の前でヤカンに水を入れながら屋敷を見上げると、二階の窓にチラチラと灯りが見えた。何事が起こっているのか、フランクにはピンとき

た。ガキどもがまた屋敷内に入り込んでゐる。あの灯りのチラつきようから見ると、火を焚きはじめたのだ。

フランクのところに電話はなかった。どのみち、リドル一家の死亡事件で警察に引っぱられ、尋問されて以来、フランクは全く警察を信用していなかった。フランクはヤカンをその場にうつちやり、痛む脚の許すかぎり急いで駆け上がり、服を着替えてすぐに台所に戻ってきた。そして、ドアの脇にかけてある錆びた古い鍵を取り外し、壁に立てかけてあった杖をつかんで、夜の闇へと出ていった。

「リドルの館」の玄関は、こじ開けられた様子がない。どの窓にもそんな様子はない。フランクは足を引きずりながら屋敷の裏に回り、ほとんどすっぱり蔦の陰に隠れている勝手口のところまで行くと、古い鍵を引っぱり出して鍵穴に差し込み、音を立てずにドアを開けた。

中はだだっ広い台所だった。もう何年もそこに足を踏み入れてはいなかったのに、しかも真つ暗だったにもかかわらず、フランクは広間に向かうドアがどこにあるかを憶えていた。むつとするほどの微臭さを嗅ぎながら、上階から足音や人声が聞こえないかと耳をそばだて、手探りでドアのほうに向かった。広間まで来ると、正面のドアの両側にある大きな格子窓のお陰で少しは明るかった。石造りの床を厚く覆った埃が、足音も杖の音も消してくれるのをありがたく思いながら、フランクは階段を上りはじめた。

階段の踊り場で右に曲がると、すぐに侵入者がどこにいたかがわかった。廊下の一歩奥のド

アが半開きになって、隙間から灯りがチラチラ漏れ、黒い床に金色の長い筋を描いていた。フランクは杖をしっかりと握り締め、ジリジリと近づいていった。ドアから数十センチのところまで、細長く切り取られたように部屋の中が見えた。

火は、はじめてそこから見えたが、暖炉の中で燃えていた。意外だった。フランクは立ち止まり、じつと耳を澄ました。男の声が部屋の中から聞こえてきたからだ。おどおどと戦っている声だった。

「ご主人様、まだお腹がお空きでしたら、まだ少しは瓶に残っておりますが」
「あとにする」

別の声と言った。これも男の声だった——が、不自然に甲高い、しかも氷のような風が吹き抜けたかのように冷たい声だ。なぜかその声は、まばらになったフランクの後頭部の毛を逆立たせた。

「ワームテール、俺様をもっと火に近づけるのだ」

フランクは右の耳をドアのほうに向けた。ましなほうの耳だ。瓶を何か硬いものの上に置く音がして、それから重い椅子を引きずって床を擦る鈍い音がした。椅子を押している小柄な男の背中がチャリとフランクの目に入った。長い黒いマントを着ている。後頭部に禿があるのが見えた。そして再び小男の姿は視界から消えた。

「ナギニはどこだ？」冷たい声と言った。

「わ——わかりません。ご主人様」ビクビクした声が答えた。

「家の中を探索に出かけたのではないかと……」

「寝る前にナギニのエキスを絞るのだぞ、ワームテール」別の声が言った。

「夜中に飲む必要がある。この旅でずいぶんと疲れた」

眉根を寄せながら、フランクは聞こえるほうの耳をもっとドアに近づけた。「瞬間を置いて、ワームテールと呼ばれた男がまた口を開いた。

「ご主人様。ここにはどのぐらいご滞在のおつもりか、伺ってもよろしいでしょうか？」

「一週間だ」冷たい声が答えた。

「もっと長くなるかもしれない。ここはまあまあ居心地がよいし、まだ計画を実行はできぬ。フイディッチのワールドカップが終わる前に動くのは愚かであるう」

フランクは節くれだった指を耳に突っ込んで、搔っぽじった。耳葉がたまったせいに違いはない。「フイディッチ」なんて、言葉とは言えない言葉が聞こえたのだから。

「ご主人様、ク——フイディッチ・ワールドカップと？」

ワームテールが言った（フランクはますますグリグリと耳をほじった）。

「お許しください。しかし——わたくしめにはわかりません——どうしてワールドカップが終わるまで待たなければならないのでしょうか？」

「愚か者めが。いまこのときこそ、世界中から魔法使いがこの国に集まり、魔法省のお節介ど